

## 『今昔物語集』の読み替え(上)

——三宝感应要略録との関連において——

宮 田 尚

『今昔物語集』は一部に、依拠資料の読み替えをおこなったはなしを収めている。

別稿でふれたように、読み替えは目的をもってとられた措置であり、一義的には、『今昔物語集』を特徴づけるその組織を構成するために用意されたものとみられる。<sup>(注1)</sup>

『今昔物語集』は、すぐれて組織的な作品だ。正確に言えば、組織的であろうとした作品だ。したがって、その組織を構成するために用意されたものとすれば、読み替えは『今昔物語集』にとつて、根幹にかかわる重要な役割をになっているということになる。

ところが読み替えは、これまでほとんど顧みられることがなかった。少なくとも、客観的で有効な読み替えに関する論はなかった。理由ははっきりしている。従来の研究には、標題をとおして『今昔物語集』をとらえようという発想が欠落していたからだ。

『今昔物語集』の標題は、けつして無機質なものでない。たしかに標題は検索に供せられるし、その面での利便性もおおきい。しかし、そ

『今昔物語集』の読み替え(上) ——三宝感应要略録との関連において——

れはあくまで結果であつて、標題の付された目的ではない。

『今昔物語集』の標題は、すでに何度かふれたことがあるけれども、享受者としての編者が、みずからの読みを示したものであると同時に、話の提供者としての立場から、享受者の読みを方向づけるねらいをもって設定したものだ。<sup>(注2)</sup>

標題によつて享受者の読みを方向づけようとの、編者の思いを支えているのは、『今昔物語集』の組織化への強い志向だ。多様な解釈が可能な話に標題で枠をはめて、解釈の一元化をはかる。これこそが『今昔物語集』の標題の、最大の目的であつた。

編者がそこにいる。あえていえば、標題は編者そのものなのだ。

標題の延長上に、編者の思い描いた『今昔物語集』がある。それゆえ、『今昔物語集』は標題をとおして読むべきだ。標題をとおして、まずは編者の構築しようとした世界をうかがい、そこを基点として、迷いや破綻、あるいは成果などといった、『今昔物語集』のかかえこんでいるさまざまな問題を掘り起こしていくべきだ。

目を近付けて標題を観察することによつて、これまで見落とされ

た問題が、あらたに見えてくるはずだ。げんに、読み替えも、そうして浮かびあがってくる問題のひとつだ。

読み替えは、もっぱら標題をおこなわれている。本文はほぼ忠実に原話のそれを継承しながら、じつは原話とは違った角度からとらえなおして導入したものであることを、『今昔物語集』は、標題で示しているのだ。だから標題に目を向けないかぎり、読み替えに託した『今昔物語集』の試みがあかまるみに出ることはない。

読み替えを標題でおこなっているのは、原話をなるべくそこねないで導入するとの方針を、『今昔物語集』がたてていたからだ。原話を自由に改変する立場にたつ作品であつたなら、あえて標題を操作するまでもない。

『今昔物語集』にとつて標題は、単なる付属物ではない。はなしの本体によりそい、それを補充しつつ作品を構築する重要な役割をになっている。付属物でないどころか、ときとしてそれは、はなしそのものを領導することさえある。

ところで、『今昔物語集』の読み替えをいうためには、その前提として、原話の読みが確定していなければならぬ。原話の読みは、これも『今昔物語集』の場合と同様、当該話の所収文献の編者のそれにしたがうべきだ。

原話の所収文献に、はなしの内容をふまえた標題が付されていれば、願つてもない。また、たとえ標題は付されていなくても、所収文献の編集目的がはっきりしていれば、原話がいかに読まれたものであるかを知る手がかりとなる。

『三宝感応要略録』はその意味で、『今昔物語集』の読み替えの

実態を説明しようとするとき、かつこの条件をそなえている。まず第一に、これは『今昔物語集』の典拠であることの確実視される資料だ。第二に、編集目的がはっきりしている。そして第三に、これらもつとも重要なのだが、各話に内容をふまえた標題が付されている。『三宝感応要略録』は、『今昔物語集』の読み替えの問題に関していえば、『日本霊異記』とならぶ、かつこの検討資料だ。

『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との標題のかかりについては、これもすでにふれたことがある。<sup>(注5)</sup>『今昔物語集』の標題は、形式のうえで『三宝感応要略録』のその強い影響下にあるというのがその主旨であつた。『三宝感応要略録』の影響下にありながら、無批判にしたがうのではなく、自己の世界を守るために『三宝感応要略録』ばなれを試みている点についても、そこで指摘した。この判断に誤りはなく、と思う。

ただ、不敏にしてこのときは、『三宝感応要略録』の側の標題のゆれに思いいたらなかつたし、『今昔物語集』の意図的な読み替えについても、踏み込みがたりなかつた。以下、その反省をこめて両者の標題を比較し、『今昔物語集』の読み替えの実態解明の一助としたい。

## 2

『今昔物語集』に目録標題と本文標題とがあるように、『三宝感応要略録』の標題にも、各巻のはじめに一括してかけられた目録標題と、各話に直接そえられた本文標題との二種がある。





験をもたらした釈迦像は完成品であったと解されるはずだ。このあたりは、本文標題と同じ路線だ。念のためにいうと、『三宝感応要略録』も、『今昔物語集』も、はなしの本体では像が未完成であったと説明されている。

『今昔物語集』の標題は、像が未完成であることに触れることを放棄し、本文標題にしたがって、靈験の内容を具体的に示す方法をとっている。△死從閻羅王宮被還▽を△得活▽といいかえたときの、力点のおき方には微妙な違いがあるけれども、ともあれこの措置によって六12は、まごうことなき蘇生譚として再出発することになった。

主述の形式にかたちをととのえた『今昔物語集』六12の標題は、目録標題と本文標題との折衷型ということになるうか。

\*

中6目・王氏感地藏菩薩誦花嚴偈排地獄感応

本・○○○○○○○○●●●●●●○○

今六33・震旦王氏誦華嚴經偈得活語

『今昔物語集』は目録標題で示されているところの、花嚴偈を誦して墮地獄をまぬかれたとの立場をそのまま承けて△得活▽とし、蘇生譚であることを標榜している。本文標題は『三宝感応要略録』にしばしばみられるかたちだが、ここには述部がない。『今昔物語集』の標題は、ここで取り上げる五話のうちでは、もっとも目録標題に近い。

\*

『今昔物語集』の読み替え(上)——三宝感応要略録との関連において——

中20目・会稽山陰書生写維摩經除疾救亡親感応

本・○○○○○○○○●●●●●●○○

今六38・震旦会稽山陰書生書写維摩經生浄土語

形態としては、『今昔物語集』の標題は目録標題に近い。

しかし維摩經を書写した結果についての認識が、両者では違っている。『今昔物語集』の本文をふまえながら、両者の差異によってきたるところを確認しておく。

六38は、次の三段からなる。

①会稽山陰県の書生某は、みずからの病を癒さんがために、願をおこして維摩經を書写したところ、願は成就した。

②維摩經の靈験あらたかなことを悟った書生は、亡き父母の苦を救う目的で、さらに書写を続けた。父母はともに救われたと夢で告げた。

③写経の功德で書生は、金粟仏土に転生すると夢告をえた。命終した彼の身は、金色にかがやいていた。人々は、金粟世界に生まれたあかしだと貴んだ。

要するに、書写の功德によるみずからの除疾と、両親の救苦と、みずからの浄土への転生との三点を六38は伝えているわけだ。この点は、『三宝感応要略録』も同様である。

まず本文標題についていうと、これは靈験を具体的に示していない。三点をふまえて、総括的に維摩經の靈験を説くことをもくろんだものとなっている。

これに対して目録標題と『今昔物語集』の標題は、靈験を具体的に示し、特定の部分を——それも、それぞれ違った部分を重視して

いる。

目録標題が焦点を合わせたのは、①と②だ。一方、『今昔物語集』は③を重視している。いずれも書写の功德を説くはなしでありながら、前者は抜苦譚を、そして後者は転生譚を志向している。

ところで、六38にみられる『今昔物語集』の目録標題はなれば、『今昔物語集』の意図的な読み替えによるものだ。

『今昔物語集』にはもともと、肉親による、あるいは肉親のための行為が原話の標題にかかげられているばあい、それを排除する傾向がある。この結果、ときには標題とはなしの内容とのあいだに、齟齬を生ずることさえある。

つぎに、『今昔物語集』が排除した例を、原話の当該部分に――を付して列記する。

上6目・唐隴西李大安妻為安造釈像救死感応

今六13・震旦李大安依仏助被害得活語

上14目・并洲張元寿為亡親造阿弥陀像感応

今六18・震旦并洲張元寿造弥陀像生極樂語

上28目・温州司馬家室親屬一日之中造業師七軀感応

今六21・震旦溜州司馬造業師仏得活語

中31目・梓洲姚待為亡親自写四部大乘經感応

今六45・震旦梓洲鄭鼎張姚待写四部大乘語

『今昔物語集』が六38で、原話である『三宝感応要略録』の標題から〈除疾救亡親〉を割愛したのは、こうした一連の操作と軌を一にするものだ。〈除疾〉はともかく、〈救亡親〉は六38ならずとも排除される状況にある。

加えて、六38には組織上、〈生浄土〉を求める条件がある。前話との関連だ。

じつは、六37もまた、書写の功德による生浄土譚であり、「震旦并洲道如書写方等生浄土語」との標題がかかげられている。六38の〈生浄土〉へのこだわりを、六37の側から見よう。

六38が①②を捨てて③を重視し、生浄土譚に意匠替えをはかったように、六37もまた、書写の功德による生浄土譚にするために操作をしている。

すなわち、六37の原話である『三宝感応要略録』中16の標題は、「并洲比丘道如唯聞方等名字生浄土感応」となっている。方等經を〈聞いた〉功德によって、主人公の僧が浄土に生まれたというのが標題の趣旨だ。ところが、はなしの本体に徴すると、この標題には問題があることが知られる。

つまり、こうだ。主人公の僧は、道心薄かったものの、方等經を〈聞いて〉いたために死後三日を経て蘇ることをえて、写經等に専念する。そして彼は、その蘇生後の〈写經〉の功德で浄土に生まれことになるのだ。

中16の標題に示されている「唯聞方等」は蘇生の間接的な契機であるにすぎず、浄土への転生の直接の因ではない。

そのことに気付いた『今昔物語集』は、標題の「唯聞方等」の部分を書写方等と改めるとともに、本文中の「造方等大集」を、「方等大集経ヲ書キ供養シ奉ル」と改変した。

六37のこのような措置は、『三宝感応要略録』の標題の不適正を是正するためのものというよりは、六38と連動するためのものであ



い(自ラ)を補なっている。

わずか一語の異同ではあるが、(自ラ)が『今昔物語集』で添加されたことについては、『三玉感応要略録』の目録標題がらみとみるのが相当だろう。

ところで、『今昔物語集』が中58を導入するに際して、不空三蔵を六9の主人公に据えなおしたのは、理由があった。卷六巻頭の、仏法伝来譚にかぶせるように配されている三蔵関連話の一群にこのはなしを位置させるためには、主人公は玄宗皇帝であってはならぬのだ。玄宗皇帝から不空三蔵への主人公の変更は、これまた、『今昔物語集』の組織上の要請にもとづく、必然の措置なのであった。

注1 『今昔物語集』卷七第一話の錯誤から

(日本文学研究 二九号 九三・一二)

現報譚から蘇生譚へ (日本文学研究 三〇号 九五・一)

2 今昔物語集震旦部考 六章(勉誠社刊 九二・六)  
3 同右